

# 管理コスト縮減を目指したニホンジカの捕獲実証事業

平成 29 年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

福本浩士

ニホンジカ（以下、シカ）を効率的に捕獲するためには ICT の活用は有効であり、その技術は急速に進歩している。囲い罠と遠隔監視・操作による捕獲装置を組み合わせることで、シカが高密度な地域においても罠に対するシカの警戒心を高めることなく、大量捕獲を実施することが可能となってきた。一方、シカの生息密度が低い地域においては、遠隔監視・操作による捕獲装置に替えて、囲い罠や箱罠に赤外線・熱感知センサー（以下、簡易センサー）を装着し、画像通信可能な自動撮影カメラ（以下、通信カメラ）で遠隔監視することで、低コストで効率的にシカを捕獲できると考えられる。くくり罠を用いた場合でも、シカの出没状況、捕獲状況等を遠隔監視することで、現場巡視経費の縮減、的確な罠移設時期の判断が可能となる。

## 1. 簡易センサー付囲い罠による捕獲実証試験

2017年9月13日大紀町の山林において、シカの出没状況、餌の消失状況、捕獲状況を把握するため、通信カメラ（商品名：ハイカム SP4G）を長さ4m×幅4m×高さ2mの移動組立式囲い罠（商品名：サークルD）のゲート外側に設置した。通信カメラの設定は6時間間隔のタイムラプス撮影とモーション感知撮影（撮影インターバル30分）とした。2017年9月21日に簡易センサー（商品名：アニマルセンサー2）を取り付け、ヘイクューブとしょうゆ搾り糟を誘引餌として捕獲を開始した。

図-1 に通信カメラで撮影された出没时间をシカの頭数別に示す。9月13日に給餌したところ翌日からシカが出没し、最大出没时间は3頭であった。9月21日に再度給餌し、9月24日にオス1頭を捕獲した。なお、捕獲前後に囲い罠の外側にシカの出没は確認されなかった。10月3日に給餌を行い、10月7日にメス1頭とオス1頭を捕獲した。捕獲直後に成獣1頭が囲い罠の外側に出没したことを確認した。その後、給餌を行ったがシカの出没は大きく減少した。これらのことから、シカの出没时间が1~2頭程度であれば、通信カメラで餌の消失状況、シカの出没时间を遠隔監視ながら、簡易センサーを取り付けた囲い罠でスレ個体の発生を最小限に抑えながら捕獲できることが実証できた。

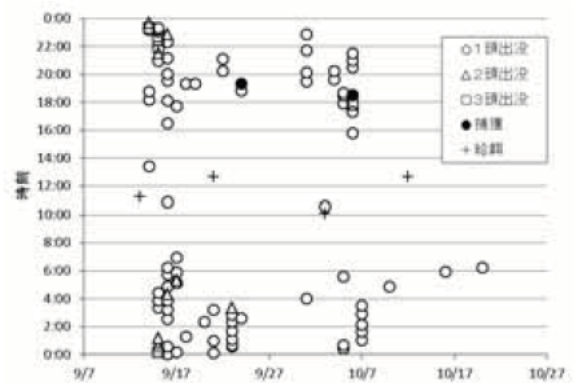


図-1. シカの出没时间と捕獲日時

## 2. くくり罠による捕獲実証試験

2017年8月29日から2018年3月22日にかけて、伊賀市の山林において、通信カメラで遠隔監視しながらくくり罠による捕獲を実施した。この期間、5頭のシカと1頭のイノシシを通信カメラ監視下で捕獲した。現場巡視も併せて行ったところ、捕獲したシカ、イノシシはすべて通信カメラで確認できた。通信カメラを用いることで、捕獲状況（あるいは錯誤捕獲状況）を遠隔監視することが可能となり、現場巡視を行わずに状況確認できるとともに、シカの出没时间からくくり罠の移設のタイミングを的確に判断でき、効率的な捕獲が可能となることが示唆された。



図-2. くくり罠による捕獲状況